
魔法の黄色い靴

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の黄色い靴

【Nコード】

N0637Q

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

中学卒業の年、新年の抱負を発表する生徒たち。それから哀しくも不思議な物語が展開していく。

ごはんライス先生の新春課題に込める作品です。課題は、

- ・テーマは「空」
- ・今年の抱負を話に入れる
- ・好きな歌の歌詞を部分的にでも採用する

・時事ネタ禁止

枚数は超過してしまいましたが、連載形式でごまかしました。(先
生、ごめんなさい)

【華】

和華子の抱負

その中学校の体育館では、三学期の始業式が間もなく終わろうとしていた。三年二組の生徒たちは、終わりそうでなかなか終わらない生活指導担当の先生の話の話を聞いているふりだけしながら、その後教室で全員が発表することになっている『今年の抱負』について、それぞれの考えをめぐらせていた。

このクラスの生徒の中に一人、学校の正門前の道をはさんで真正面に建てられている定員八名ばかりの小さな児童養護施設、『黄色い靴』に入所している生徒がいた。その子、里藤和華子しりとうわかしは、今春中学校を卒業することになっている。

今を去ること九年前、当時和華子の両親は飲食店を営んでいたが、借金に借金を重ねいわゆる『街金業者まちきん』に返済を迫られて追い回されることになり、ついに二人は、小学校入学寸前の彼女を残して夜逃げしたのであった。和華子は当時父親から、『お父さんたちは、しばらくお仕事で出掛けるから、おまえは黄色い壁の家に行つて食べさせてもらいなさい』と言われた。しかし、その後両親が彼女の前に再び現れることはなかった。

三学期の始業式が終わつて教室に戻つたクラスの生徒たちは、冬休み前に先生から宿題として出されていた原稿用紙一枚分の『今年の抱負』を一人づつ前に出て読み上げることになった。

ところが和華子は肝心の宿題の内容を知らなかった。冬休み前のホームルームで配られた冬休みの宿題を箇条書きにしたプリントで、和華子に学級委員の生徒から配られたものは、その一番最後に一行だけ書いてある、『“今年の抱負”という題で原稿用紙一枚分にまとめてくること。年明けの始業式の後、教室で発表してもらいます』

のところを切り取られていたのだ。

和華子に対するこの程度の『いじめ』は日常茶飯事であった。和華子が中学校入学の時、担任の先生は皆の前で、『里藤さんはご両親がいないので養護施設から通っていて、皆と違ういろいと大変なこと多いから、困っているときは助けてあげましょう』と言った。しかし、その先生の言葉は、その時点で三年間の彼女に対する『いじめ』をかえって助長し決定付けるものとなった。

……両親がいらないなら何をやっても怒られることはない……

和華子に対する男子生徒のいじめはさほどでもなかったが、昨年担任の先生の推薦で決まった学級委員の女子生徒、野原祥子（しんげいの）は毎日執拗に仲間と一緒にあって彼女へのいじめを繰り返していた。

「はい。それでは今日は出席番号の後ろからお願いします。まず、持ってきた『今年の抱負』を読んでもらって、そのあと必ずみんなの熱い思いや決意をアドリブで話してください」

祥子は和華子のほうをちらっと見た。和華子は訳がわからずきよとんとしている。出席番号三五番の渡辺君が前に出て発表した。渡辺君は男子バレー部の副キャプテンで、今年は県大会のベスト十六まで勝ち進むことを目標にして発表した。他のバレー部員からひんしゆくを買い、最後のほうは小さな声になっていた。次の女子の和田さんは私立音大付属高校への推薦入学がすでに決まっていたので、ピアノコンクールの高校一年の部で入賞することを宣言した。優等生すぎる『抱負』にクラスの皆は何となくしらけムードになっていた時だ。和華子の番になった。

和華子は顔を真っ赤にしながら、自分の席で立ちあがり小声で、「宿題持ってきていません」と言った。先生は一瞬顔を曇らせたが、手招きをしながら、「そうですね。では、全部アドリブですね。こちへ来て、皆の前で発表しなさい」と言った。

和華子は先生の言われたとおり前に出て、小さな声でうつむき加

滅に話し始めた。

「あの……。今年は、私……」

教室の中が少し静かになった。そのあと和華子は観念したように顔を前へ向けて言った。

「私、鳥のように大空を飛んでみたいです。空を自由に飛びまわるんです。それから風になって飛んでいって……。そう、富士山の頂上を見下ろしたいです」

一瞬教室内がシーンとなった。先生が口火を切った。

「あのねえ。里藤さん。それ、全然抱負ではないです。今年目標にすることとか、そういうことですから。実現しない夢を発表するものではありませんよ」

祥子が突然キヤーと言いながら笑い出した。それにつられるように教室の中は爆笑の渦となった。和華子は顔を真っ赤にして両手でその顔を覆った。それと同時に先生はポンと彼女の背中を叩き、席に戻るよう促した。

誘われて……

校門を出てすぐ和華子は同じクラスの数人の男子生徒に取り囲まれ、そのうちの一人に声を掛けられた。

「和華ちゃん。今日は一緒に映画でも見に行こうか」

和華子が男子に誘われるのは中学三年間でも初めてで、彼女は信じられないような顔をしていたが、すぐに下を向いて言った。

「私、お金ないんです。ごめんなさい」

……また、からかってるんだ……

声を掛けた男子生徒がにこにこしながら言った。

「いいよ。お金は。貸してあげるから」

和華子の月二千円のお小遣いでは借りても簡単に返すことはできない。それでも彼らは和華子を取り囲んだままなので彼女はついていくことにした。

和華子は声をかけた男子生徒の自転車の荷台に乗せられた。

その自転車は電動アシストだったので、上り坂も和華子に乗せてすいすいと登っていった。そして映画館のある繁華街と正反対の方向の丘の方へと進んでいった。

和華子は丘の上で男子生徒に『さあ降りて』という言葉をかけられて、ようやく自転車が全く逆の方向へ来ていることを知った。そこには学級委員の祥子が立っていて、微笑みながら和華子へ声をかけてきた。

「和華子。あんた、今年は鳥になって飛ぶって言ってたわよね。さっそくやって見せてくれる？」

実に意味のない子供じみた『いじめ』である。

和華子は立っている位置から下のほうを覗き込んだ。そこは数十メートルの切り立った崖のようになっていて下のほうは木が繁ってその先はよく見えない。

「できなかつたらその髪を金髪に染めて明日学校へ行くのよ」

ずるがしこい祥子は決して自分で直接手を下したりはしない。常に先生や学校側の制裁によっていじめを実行するのだ。

和華子は何となくうつろな目をしていた。そしてその目は大きな空に向けられていた。

……鳥かあ。本当に鳥になって大空を飛び回りたいなあ……

和華子は五・六歩後ずさりし、大きく両腕を広げ、そこから全力で走り出した。

そして、一瞬の後、崖の下へと消えていった。

無縁仏

神奈川県某市の市街地郊外にある山寺。

急な階段を数十段上がったところ、山の中腹辺りに寺の所有する納屋があり、そこには多くの『無縁仏』の遺骨が保管されている。

身寄りのない、遺骨の引き取り手の全くない者が亡くなった時に、公費でお経をあげ火葬されて、そこへ保管されているのである。無縁仏であるから、普通いくら待っても遺骨の引き取り手が現れることはない。寺が存在する限り、これらは埋葬されることなく保管されたままとなっている。何十年も経った遺骨は散骨されることになっているが、年数の管理が世代レベルなため、世代を超えて管理することは困難であり、このため一般的には歴史の古い寺院ほど無縁仏の遺骨は多くなっている。その骨が将来どうなるのかは誰にもわからない。生きている者はこれらを意味なく保管し、次の世代へと引き継いでいく。

和華子は気が付くとその山寺の本堂の中央にただずんでいた。

……あれ？　ここはどこだ？　私はどうしたの？　……

その時の和華子の姿は、崖の上から落下して服がぼろぼろになった状態だった。しかも衣服のいたるところに血のりがべっとり付いている。動く度に体のあちらこちらで痛みが走る。和華子は誰もいない静まりかえったお堂に立つたまま、あれこれ考えをめぐらして、自分なりに一つの結論らしきものを導いた。

……そうか。私は崖から落ちて死んだんだ。それで、死に方が悪かったからあの世に行けずにここにいるんだ……

……私って死んでもやっぱりまともじゃないのよね……

和華子は寺を出てしばらく山の中を歩いた。そして、大きな洞窟を見つけると自然と体が吸い込まれるようにそこへ入って行った。

洞窟の中は少し暖かった。すでに日が暮れかかっていたので、ここで和華子は今晚睡眠をとることにした。

……霊だつて疲れるもんね。だからね。眠るワケよ。そうそう……
和華子は自分勝手に納得し、ほどなくして深い眠りについた。

出違い

洞窟の中に男性の声が響いている。

「おい、ここは心霊スポットじゃねえか」

「そうそう。意外と知られてないけど霊がいっぱいいるらしいよ」

「おまえ、霊からパワーもらうって、おかしくねえか？」

「いやいや、霊に生気を吸い取られるっていう解釈は旧いんだ。本当は心霊スポットは最高のパワースポットなんだぜ」

「何かおまえが言っていると余計に嘘っぽいなあ」

「大丈夫。ほら、いっぱい霊がいるってのに、何ともないだろう。問題ない問題ない」

……何の話？ 誰よあんたたちは。霊がいっぱいいたなんて、私一人ぼっちよ！ 何テキトーなこと言ってるのよ！ ……

「おい。その辺に霊がいるぞ。ほら、その辺りだ」

「やめてくれよ。やっぱり俺帰る」

「ばか、本当にいるんだ。俺には見えるぜ」

「おまえ一人で行ってくれ。もうだめだ俺は」

弱気なその男は回れ右をして、腰が抜けたようにふらふらしながら洞窟の入り口へと戻っていった。

そして血まみれの服を着た和華子は残った男の真正面に姿を現した。一瞬その男はひるんだが、すぐさま和華子のほうに歩み寄ってきた。

「君。名前はなんていうの？」

「私、和華子。里藤和華子」

「そう、わかちゃんね」

「うっん、わかちゃんじゃなくて和華子よ」

和華子は中学校でいじめをしていた男子生徒が『和華ちゃん』と言って彼女をからかっていたことを思い出して、きつぱりと言った。「そう。和華子ちゃん。君、可愛いね。でも、その服どうしちゃったの？」

「崖から落ちたの。鳥みたいに飛ぼうと思って……」

「着替えようか。そのままじゃあ人前に出られないよ。さあ、ここでお脱ぎなさい。山の下の店でジャージ売ってたから買ってきてあげるよ」

「ありがとう」

「……………」

「ありがとう」

「……………」

「ありが……。あんた何でそこにいるわけ？」

「だから早くお脱ぎなさい。心配いらなから」

「ぶーっ！ あんた単なる『どヘンタイ』じゃないの？ 幽

霊脱がしてどうするのよ！」

「僕には霊能力があるんだ。何でもお見通しだよ。君の心の中までもね。君は今、寂しいんだろう？ 僕は君の悪いようにはしないから安心して脱いでね」

「……………」 『安心して』 まではいいいけど、『脱いでね』 と全然、話つながらってないよ。何だか、とんでもないヤツに出会っちゃった……………」

身も心も……

寂しくてたまらなかった和華子は、とうとうその男と一夜をともにした。

今春高校生になるはずの和華子は初めてその男に身も心も全てを委ねてしまったのだ。

その男の名は米山英悟よねやまえいごという。

彼は小説家を目指していて、過去一度文学誌の運営する企画に応募し最後まで入賞の選考に残っていたが、選考寸前のところで一人の心無い審査員の『これは小説としては群を抜いているが、児童に与える影響が心配される』の一言で落とされたのであった。

その一篇に全ての望みをかけていた彼は酷く失望し、食事も喉に通らなくなり、そのまま死に至るような状態だったという。

「その時のことは自分でもよく覚えていないんだ」

しかし彼は現に今、和華子の目の前にいる。立ち直って生き返ったのだ。米山は大きく息を吸い込みこう語った。

「意識がもうろうととしていた中で、僕に生きる力を与えてくれた人がいた。当時、中国から日本語の通訳として来日していた一人の女性だ。その人は僕のことをこよなく愛してくれた。僕は彼女の愛に救われたんだよ」

「ふうん……」

和華子はその話を聞いて、心の中にその中国人女性に対し嫉妬している自分を発見し、思いもかけず彼への思慕を自覚することになった。

彼女は一夜にして米山に心奪われてしまい、今後彼のもとを離れることができそうになくなってしまったのだ。そして、もっともっと彼の話聞きたくなってきた。

まずはおねだり作戦だ。

「ねえ、私に服買ってきてくれるっていったでしょう？ ジャージじゃなくつてもつとちゃんとした可愛いワンピースかなんか買つてよ。あつそうそう。血がいつぱい付いちゃったから、インナーも買ってきてくれない？」

「インナー？」

「やだ。肌着のことよ。小説家がそんなことも知らないわけ？」

「いやいや、よし。まずそのインナーから買いに行こう」

……しめた！ 餌に食いついてきたぞ！ ……

「君は霊だから普通の店には行けないな」

「ええ？ そうなの？」

「すでに廃墟になってしまった店に行くんだよ。そこには、僕の知っている『霊』の店員がいる」

和華子は一瞬背筋がぞくつとした。

「やだ。怖いよう。米山さん」

「阿呆！ お前の方が怖いんだよ。あと、俺のことは『ライス』って読んでくれていいよ。『米』のライスだ。ちよつとカツコイイだろう。はっは」

こわいお買物

米山が廃墟になつていると言つたその店は、洞窟から寺と反対側へ山を降りたさびれた商店街の中にあつた。しかし見た目は全然廃墟ではない。小綺麗な洋品店が二軒、軒を並べている。

「君の靈力で当時の立派な店になつているんだよ。店員は皆、地縛靈だ。成仏できない靈は地縛靈といつて、普通は同じ場所にいて遠くに動き回ることはないんだ。逆に動き回る靈は浮遊靈といつて、すでにあつちの世界に逝つた靈がこの世に姿を現すものだ。浮遊靈は人に悪さをしない」

「私は浮遊靈なの？」

「いや、地縛靈さ。人に悪さすることはあるけど、すげえパワー持ってるやつだ」

「でも私、勝手に動いちゃってるじゃん」

「はは。君は変わつてるからね」

…… 変わつてるから？ その通りだけど全然説明になつてない！

……

「いらつしゃいませ」

美しい店員がにっこりと微笑んだ。

「ああ。パンツくれないか。この子のパンツ」

美しい店員の表情は一変して不愉快そうになった。

「こちら、インナーショップですので、パンツ（語尾を上げる）は扱っておりません」

米山も負けじと言う。

「パンツ（語尾を下げる）だよ。パンツ。ああ、そうだ。シリの全部見えるやつはないか」

美しい店員の表情はみるみる変わつて口角が段々と裂けていくように見えた。和華子は慌てて二人の会話に割つて入つた。

「あの。ブラとショーツが欲しいのですが……」

美しい店員の口がもとに戻った。しかし、米山の言葉が消えかけた火にまたぞろ油を注いだ。

「そうそう。ショーツは生シリの全部見えるやつね」

今度は美しい店員の前歯が牙に変わっている。

「ムキツ！ もしかしてハンガータイプのことですか?!」

牙をむいた美しい店員は一枚のショーツを引き出しから出してきた。

「ラ・ペルラのハンガーです。八万五千円になります」

「ゲっ！ ドラム式の洗濯機が買えるぜ！」

今度は米山の表情がさつと変わった。

米山の表情を見て、美しい店員の姿が急に店長らしい紳士風で金縁の眼鏡をかけた男の姿に変わった。

「当店は商品の代金分の金銭を貸し付けております。年利率は特別に二百%で結構です。どうぞご利用下さいませ」

和華子はインナーショップとその隣の洋品店をはしごして、上から下まですっかり綺麗な衣服に着替え、『次は廃墟の遊園地に行かない？』と米山におねだりした。

米山は、頭を垂れながら、とぼとぼと和華子の後ろに付いて歩いていった。

遊園地の入口には、入園料大人一人十万円と書いたプレートがあり、その脇には先ほどのショップにいた金縁眼鏡の店長が立っていた。

周美美という女

「霊でもお腹減らすんだね」

和華子はまず、遊園地の中にあるレストランに行こうと米山を誘った。

米山はレストランの辺りに金縁眼鏡の店長がいないことを確認して一人呟いた。

「まさか、昼飯は普通の値段だろうな……」

米山はレストランに入るなり、後ろからウエイトレスの女性に声をかけられた。

「あんた！ あんた、何ばしよつとね！」

米山はその声に敏感に反応し、急に明るい表情になって勢いよく振り向いた。

「メイメイ！ メイメイじゃないか！ おまえこんなところにいたのか！」

……メイメイ？ 中国人？ もしかして彼を愛で救ったという通訳の女？ でも、何か日本語ヘンじゃない？ ……

その『メイメイ』と呼ばれた女性がさらに言う。

「こないに可愛か女子おなしば連れようて……。うち、ほんなこつ悲しかあー！」

……これって、博多弁か何かじゃないの？ なんで？ ……

米山とメイメイはその場で抱き合った。

「和華子。こいつが話していた日本語の通訳だ。僕を救ってくれた……。紹介しよう。周美美しゅつめいめいだ。メイメイ、この子は里藤和華子。まだ高校前の子供だよ」

メイメイは怪訝そうな目をして、和華子の周りをゆっくりと回り、舐めるような視線を注いだ。

「ライス。手ば出したらいけなかよ！ まだ子供じゃっけん」

和華子は上目使いにメイメイを見ながら小声で主張した。

「あの。私もう大人です。大人になりました」

米山が慌てたのは言うまでもない。

「おい！ おまえ、何てことを！ まるで俺が君を大人にしたみたいな言い方しやがって！」

「だって、そつだもん。ライス。タベ、私のこと可愛い可愛いっていつぱい、あちこち撫でてくれたじゃないのよ」

「おっ、おまえ、言うにこと欠いて、違う違う！ メイメイ！ 違うんだ！」

メイメイの髪の毛がみるみる逆立っていくように見えた。

「おい！ライス！ どん面さげてうちとこ来よっとなー！」

「ひっ、ひいいいいい」

ビリビリビリビリ……………グワシャーン！……………

……………ヘンな中国人だわね。ホントにライスのこと愛で救ったようには見えないけどなあ……………

そのあと和華子はレストランで三万円のフルコースをいただいてすっかり満腹になった。

その間、米山は『食欲がない』と言って、メイメイの出したぬるい水を時々すすっていた。

「和華子。何だか目が半分見えないよ。僕の顔どうにかなってる？」

「ん？ ああ、海老蔵状態になってるよ」

「病院行った方がいいかな」

「嫌よ。廃墟の病院だけは怖すぎ！ ライス一人で行ってくれないかな？」

「冷たいなあ。もういいよ。おまえとはもう一生遊んであげないからな！」

途端に和華子の顔は泣き顔になった。

「ライス！　ライス！　ううう……」

やっぱりまだ、和華子は子供のようである。

二人の関係

和華子は米山にますます惹かれていった。少しエッチが過ぎるところも感じていたが、何よりも気持ちがストレートで心に一点の曇りもないところが彼女にとって彼の最大の魅力であった。

和華子はまだ子供であったが、早く米山のお嫁さんになりたいという気持ちで一杯だった。しかし、そこには、年齢の問題以前にどうにもならない二人の関係が存在していた。

…… ライスは人間、私は幽霊……

この世の人間が幽霊と結婚したなどという話はいぞ聞いたことがない。だいいち、結婚できたとしても生まれる子供はいつたい何なんだ。

「僕、生まれてきたけど、本当は死んでるんだよ」
生きてるのか死んでるのかいつたいどっちなんだ！！

いつ別れるかも知れないが、今の時を味わい、愉しむことしかできない。和華子はそのことを考えるととてもなく悲しくなってきた。

物心ついた頃からいつでも一人ぼっちだった和華子。

たった一つ、大空が友達で、いつも見上げていた和華子。

そんな彼女にとって、米山の存在はこれまで一度も味わったことのない家族的な安心感を与えてくれた。それは、常に自分のことを気にかけてくれる人がいる、という安心感に他ならない。決して米山と離れたくない。その気持ちには、和華子の大好きな大空を突き抜けて黄泉の国まで届くような勢いが感じられた。

…… そうだ。私は大人なんだ。こうしてはいられない。ライスともう一度レストランでフルコース料理を食べて、そのあとまた、私は

ライスと結ばれるんだ……

和華子は米山と別れる前に彼の住所を訊き少し驚いた。

彼の住所は和華子が崖から落ちたあとに目を覚ました寺院の住所
そのものだったのだ。

「お寺さんの息子さん？」

米山は二人の間の『空気』を見つめたまま何も答えなかった。

廃墟でデート

翌日、和華子の思惑通り、二人は廃墟となったイタリアンレストランの前で再び待ち合わせをして、仲良く中へ入っていった。店は例によって廃墟ではなく当時繁盛していた頃の明るく綺麗なものであったが、中に入るとシブい感じのクラシカルな雰囲気があった。

和華子は今日は自分をご馳走するつもりでいたので、遊園地の出口にいた金縁眼鏡の店長に十万円もの金を借りてきていた。もちろん返すあてなどないが、和華子には思惑があった。

……どうせあいつは地縛霊だ。私みたいに遠くまで動けるわけじゃない。へへ。いざとなれば逃げちゃおう……

こういうことは『思惑』とは言わない。単なる詐欺か泥棒だ。

「いらつしやいませ」

きちんとした身なりのボーイが二人を席まで案内してくれた。

和華子は遊園地のレストランで中国人の博多弁らしき通訳のメイメイに、フルコース料理のことについて色々と教わっていた。メイメイはマナーを知らない和華子の食べ方を見るに見かねて教えてくれたのだ。

椅子を自分でひいて座ってはいけない、フルコースは最低二人用なので二人で別々なコースを頼んではいけない。そんなことから教えてくれた。それからメニューの選び方。普通、フルコースメニューは複数用意されていて値段の安い順になっているが、実は最初にあるコースがその店の創業時代からの伝統的なレシピを忠実に再現したものであることが多い。その店を有名たらしめたメニューであるから、最も多くの人の口に合う定番料理といって良い。だから、初めて訪れた店では格好をつけて値段の高いメニューを選ぶのではなく、まずはその定番メニューを食してみるとというのが店に対する隠れたマナーである。

いやいや、マナーの話などはどうでもいい。

「ねえねえ。この流れている曲、素敵ね。何だかビートルズっぽいメロディーじゃないかしら」

「おまえ。ビートルズなんて知ってるの？ 聞いたこともないくせに……」

「失礼ね！ うちの施設の所長さんが大好きで時々施設の中で曲が流れていたのよ。この曲何？ って聞いたらビートルズだって言うてた」

「これ、だいいち日本語で歌ってるじゃねえか。確かに曲奏は似てるけどビートルズじゃないよ」

ワインを手にしたまま、二人の会話が途切れるタイミングを伺って耳を傾けていたソムリエがそつと教えてくれた。

「これは、一九七二年に『チューリップ』というグループがリリースした曲でございます。曲名を『魔法の黄色い靴』といいます。お客様はさすが、お耳がよろしいですね。当時このグループはビートルズにかなり影響を受けていたとも聞いていますよ」

ほら、とばかりに和華子は胸を張って見せた。

次の瞬間、突然店の中の模様ががらつと変わり、古めかしい日本料理店のようになった。二人は驚いて入口の暖簾を見た。

『う・な・ぎ』と描かれた幟がひらひらと風にそよいでいる。

……何これ。せつかくいい雰囲気だったのに……
米山も目も白黒している。

「何に致しましょうか」

店の番頭さんがお品書きを持ってきた。中を開いてみると、品書きが一つしかない。

『うな重』松 四六〇〇円 竹 三六〇〇円 梅 二六〇〇円

「高いなあ……。あれ？ おい。この『草』って何だ？ 聞いたことないぞ」

和華子はメイメイの言葉を思い出した。『フルコースでは一番安いコースがその店の定番料理』。

しかし残念ながらこの店はフレンチでもイタリアンでもない。うなぎ料理だ。

「すみません。この『草』、二つ下さい」と和華子。

「おいおい、三百円だぜ。せつかくだから、梅の二六〇〇円にしようよ」と米山。

「いいの。この店創業時代のレシピを再現したものだから」

「レシピ？ 何のレシピだよ。ウナギさばいてタレ付けて焼くだけじゃん」

「きつとタレの作り方よ」

和華子の言うとおり、三百円のタレは最悪だった。しかも大きめのドジョウに醤油をかけたようなものだった。

……超まずい……。三百円でも高いかも……

何故か番頭が泣いている。

「うつつ。この味で店は潰れ、主人は自殺しました。私を道連れにして……。うつつ」

番頭の目玉が段々と飛び出てきた。

「げーーーーっ」

「ぎゃーーーーっ」

二人はほぼ同時にドジョウ、いや、ウナギを嘔き出した。デートが台無しである。

いや。そもそも、幽霊が幽霊を驚かしてどうするんだ！

山寺の和尚

和華子はふと回想した。

遊園地に行つて米山がメイメイに『ぼっこぼこ』にされた際、和華子が廃墟の病院には行きたくないと言つたら彼は『廃墟』を否定しなかつた。この世の人間であれば自分の怪我を治療するのに廃墟の病院に行く必要がない。いや、そこで治療は無理だ。

……もしかして、ライスは私と同じく『霊』の存在なのかも知れない……

こうなれば、もう、そうあつて欲しいという願望が彼女にそう思わせたのかも知れない。

和華子はそう思い込むと、いてもたつてもおられず、米山のいる寺へと足が向かつていた。

がらんとした本堂には寺の住職のような年配の男がお経をあげていた。

読経がひと段落して和尚はゆっくりと立ち上がり、和華子の方に向けて向けた。最初から彼女がいることを知っていたかのように……。

「何用かな、お嬢」

「……あの……。こちらに米山英悟さんという方いらっしゃいますか？」

「おらん」

「嘘です」

「おらん！」

「いえ、います」

「おらんと言つとらつが」

「嘘つき！ 嘘つきいーいー！」

和尚は諦めたように庭の方を見ながら、そして言った。

「無縁仏じゃ。この山の下の家で三年前に亡くなった。発見された時には過度の栄養失調だったそう。遺骨はこの寺で所蔵している」

……ええええっ！ やっ、やっぱり彼は亡くなっていた！……

衝撃的な事実ではあったが、彼女は何故か冷静だった。

「あのう。どうしても彼に会いたいのですが、どうしたらよろしいでしょうか」

和尚は和華子の言葉に首をかしげた。

「何を？ 死んだ人間に会いたいだと？ そんなことができれば、我等仏に仕える身の者など要らんというものだ」

「ええ。私も生身の人間でないことはすでにお分かりの通りです」

「お嬢。何のことじゃ。おまえは気がふれておるのか」

「いいえ」

「いやおかしい」

「いいえ。おかしくありません！」

「絶対おかしい！」

「おかしくない！ おかしくな——い！」

和尚は再び諦めたように庭の方を見ながら、しかしきっぱりと言った。

「おまえは死んでなどおらん。飯も食うし、糞もする。立派なこの世の人間じゃ」

……下品なヤツ！ それで仏に仕える身だなんて！ えっ、ええええっ！ 今度は私が生きている？！……

和尚は突然和華子の方へ寄ってきて、彼女の頬をびしゃりと叩い

た。

「痛っ！」

「ほつれみる。霊が『痛っ』とか言つものか！ 目を覚ますのじゃ！」

続けて和尚は和華子の尻をぺんと叩いた。

「あっ！ やだ！ エツチ！」

「ほつれみる。霊が『あっ！ やだ！ エツチ！ やだ〜ん』とか言つものか！ 目を覚ますのじゃ！」

……『やだ〜ん』なんて誰も言っていないよ！ ……

千羽鶴

……私は崖から落ちて、一命を取り留めた。助けてくれたのはライオスだったのかも知れない。そうだ、そうに決まっている……

和華子は今となってはそう思うことしか自分の気持ちを支えるものがなくなっていた。

……また、この世でたった一人になっちゃた……

さらに和尚は、和華子にとって最も耐え難いことを伝えた。

「米山の霊はついに成仏為された。お嬢を『女』にして、此岸しがんの未練を払拭したようじゃ……。のう、お嬢。これより御仏みほとけはお嬢とは棲む世界が違うのだ。冥福を祈り続けることこそが、お嬢の為すべきことなのだ」

万人の涙は悲しみのストレスを解消するために流れるという。しかし、夜を徹して泣き続けた和華子にはもう流す涙すらなかった。彼女はその日から食べることを止めた。彼女には米山と同じ末路をたどる覚悟があった。そして、彼女は和尚から譲り受けた經典の冊子一枚ずつ切り離し、その日から本堂の片隅でひたすらに千羽鶴を折り始めた。

和華子の祈りはただ一つ。

あの世で米山に会い、そして結ばれることだけだ……。

和華子は日が落ちると表の厠へ行き用をたし、傍らの古井戸で水を飲み本堂へ戻ってくる。

それから何かにとり憑かれたかのように、一心不乱に鶴を折り続ける。眠ることも食することもしない。いったい何日経ったかも彼女自身わからない。

和尚は和華子のことを心配して、粥などを差し入れてくれたが、和華子が口にするとはなかった。

和尚は驚きの目をもって彼女の姿を見ていた。

……お嬢は、即身仏にでもなるつもりなのか……

和華子は鶴を折り続けた。そしてとうとう千羽目を折り終えると、和尚の肩を借りながら納屋へ降りていき、それを無縁仏、米山英悟の遺骨にかけた。

その翌日、和尚が納屋を覗いた時、米山の遺骨にかけた筈の千羽鶴がなくなっていた。和尚は納屋の中を探し回ったがもともと探すまでもない。折鶴は一目で判るほどのかなりの量であった。

和尚は訳がわからずにぼうつとしながら本堂へと戻った。そこには、床に横たわる和華子の姿があった。和尚がこれに駆け寄り抱き起こすと、彼女は僅かに微笑んだようにも見えた。

そして……。

とうとう和華子は絶命した。今度こそ本当の最期であった。

和尚は彼女の安らかな表情を見て、明日の朝まではそこで横にしておいてあげることにした。

米山の遺骨のある寺。その寺の本堂で、和華子は哀しくも短い人生を閉じた。

大空の彼の元へ

朝になった。

山の頂から見える地平線からは朝日が顔を出していて、一面に輝くような陽が差ししていた。

がさがさがさ。ばさばさばさ。

本堂の方から異様な音が聞こえる。

和尚は不思議に思い、本堂に行った。ふすまを隔てた脇の部屋から、けたたましい羽音が聞こえる。和尚はふすまを開けてみてその光景に仰天しひっくり返った。

その部屋にはぎっしりと鶴、そう、本物の鶴が羽根を羽ばたかせていた。その部屋から廊下、廊下から裏庭へと続き、延々と鶴が連なり羽ばたいている。

先頭の一羽が大きな鳴き声をあげたかと思うと、鶴たちは一斉に本堂へ走りこんできた。それらは本堂に横たわる和華子の亡骸を幾重にも取り囲み、数羽ほどが彼女を器用に羽根に乗せ、本堂から一気に助走をつけて空へと飛び発っていった。後に続く鶴たちも次から次へと本堂から飛び立っていく。

和華子に乗せた鶴たちは遙か地平線の彼方へ飛んでいった。おびただしい数の鶴たちが連なって大空を飛んでいく。すさまじい光景。まさに真正正銘の『千羽鶴』だ。

飛ぶ鶴の上で和華子の目は開いていた。生きている筈はない。しかしその目はしっかりと見開かれていた。

……あれえ？ 私、飛んでる。大空を飛んでるよ！ ああ、富士山だあ。私、富士山見下ろしてるよう……

……へへーん！ みんなざまあみろい。私、飛んでるぞう！ 今年の抱負、抱負実現だよー！ ……

前方、雲の中から別な鳥の群れがこちらへ向かってくるのが見えた。何だろう。

……えええっ！ ペツ、ペンギンの群れ？ ペンギンが空飛んでる。ウツソー！ ……

先頭の大きなペンギンの背中には見覚えのある女性が乗っている。

「あつ、メイメイ！ メイメイでしょ？ あなた何やってるのよう！」

「おーい。あんたこそ、何ばしよつとー！」

「あんたも死んでたのかあ。ははは。廃墟にいたもんね。みーんな一緒だ。あはは」

和華子の額は朝日を受けて光輝いている。そして瞳も。

メイメイは何故か色鮮やかな黄色の靴を履いている。そして空の上で彼女はその靴を脱いで和華子に手渡した。

「これ、履きんしゃい。もうあんた、ライスから離れられんよ」

「ほんとに？」

メイメイはにこにこしながら、「あんたには負けたばい。いんや、あいつにはもう興味、のうなつたとね。じゃけんあんたに譲っちゃるけん」

気が付くと靴が独りりで和華子の足にまわりつき、彼女は黄色い靴を履いていた。そして、彼女を乗せていた鶴が大空の中へと離れていった。

…飛んでいる。飛んでいる。私、一人で大空を飛んでいる。朝日に向かってまっしぐらだあ！ ……

日本アルプス連峰、大きな山々のそのまた向こう。大きな川が見える。そのまた向こうには大きな海が見える。日本海？ いえいえ、水平線が見えなくなって海が空へとつながっていく。

和華子は一層スピードを増して天まで昇る、昇る。そしてまた昇る。

……この先に彼がいる。ライスがいる。今から行くからね！！……
……ありがとう、ありがとう。私、ライスと結ばれる……

突然、かつて彼とイタリアンレストランでデートした時に聞いた、あのメロディーが聞こえてきた。

……そう、たしかチューリップっていうグループの歌……

……たしか、『魔法の黄色い靴』、だっ たっ け、かな？……

お陽様の方から聞こえる。そしてどんどんはつきりと大きな歌声になっ てい く。

君、僕の靴をすてて逃げて走っても
ほらね、僕の靴は君をつれてくるよ
君は知らない、僕の黄色い靴を
だから君はもう僕からかくれられない

大きな海を川を越えて

僕のちっちゃな（ちっちゃな）家まで
帰ってくるっ！

Oh、そうだよ！

誰にもあげない魔法の靴さ

Oh、そうだよ！

誰にもあげない魔法の靴さ

Oh、そうだよ！

誰にもあげない魔法の靴さ

Oh、そうだよ！

誰にもあげない魔法の靴さ

<了>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0637q/>

魔法の黄色い靴

2011年1月9日23時10分発行